

## 宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編4 3話

### 救国の英雄ジャンヌ・ダルク フランス

パリのバンドーム広場にあるホテルを後にしてルーブル博物館へ向かっていた時、朝日にきらきら光る銅像が目撃される。金ぴかの馬上の女性像である。もしやこれはジャンヌ・ダルクの像ではないかと直感した。ガイドブックで確かめると“当たり”であった。ジャンヌ・ダルクは誰でも知っているフランスの英雄であり、オルレアンの乙女として日本でもよく知られている。

ジャンヌ・ダルク（1412年～1431年）はフランス北東部にある農村地帯のドンレミに生まれ13歳の時に神の啓示を受ける。それはまだフランス王となるための戴冠式を済ませていない、シャルル7世に戴冠させ、オルレアンを救えというものだった。

14世紀フランスとイギリスは100年戦争で互いに争っていた。フランスの国力は、荒廃した国土や農民の暴動などで惨憺たるもので、シャルル7世（在位1422年～61年）の即位前は国自体が崩壊寸前の危機的状況であった。

こうした時、17歳となった農民の娘ジャンヌ・ダルクが神の啓示を受けたとあって立ち上がり、失意のシャルル7世をシノンに尋ね、戴冠式を行うべしと説き伏せ、自ら戦陣の先頭に立ちイギリス軍に7カ月も包囲され風前の灯にあったフランス軍最後の砦であるオルレアンをわずか1週間で解放し包囲していたイギリス軍を敗走させたのである。



パリにあるジャンヌ・ダルク像

そしてランスの大聖堂でシャルル7世は戴冠式を執り行うことができ、ここに正式にフランス王として即位したのである。

ジャンヌ・ダルクは向かうところ敵なしの進軍を続けイギリス軍に占領されていた地を次々奪還していき、奪われ続けて来た領土を回復していったのである。フランス王となったシャルル7世は敵国イギリスと講話の道を模索し、一方ジャンヌ・ダルクは戦いの継続を主張した。そして次第に王の心はジャンヌ・ダルクから離れていく。ジャンヌ・ダルクは孤立し、王の援助の無いままパリ奪還に挑戦するがかなわず、捕らえられイギリス軍に売り渡されてしまう。

ジャンヌ・ダルクはイギリス軍支配の地ルーアンで、司教ピエール・コーションによって異端審問にかけられる。彼女への異端審問は政治的な思惑があり、物的証拠も法的根拠もない中で、それは始まったのである。弁護士を付ける権利も与えられず、裁判でも敵国イングランド側ばかりでフランスの聖職者の出席はなく、後年見ると裁判記録も重要なところがジャンヌ・ダルクに不利になるよう改ざんされていることなどが判明している。

判決は異端の罪で重罪人と決めつけられ、19歳の若さで火刑に処されてしまう。そして後に何も残らぬよう遺灰はセーヌ川に流されてしまった。

フランス軍を勝利に導いたジャンヌ・ダルクは死後25年を経てローマ教皇の命で復権裁判が行わ

れ無実と殉教が認められ、1920年には聖人に叙せられ、フランスの守護聖人の一人となった。15世紀のフランスの救世主であり、カトリック教会の聖人に列せられたオルレアンの乙女は、フランスの国民的英雄として今日に至るも人々の尊敬を集め祀られている。